

サ
ン
プ
ル

「……おかしいな。今日はこの奥まで入るつもりはなかったのに」

背負った籠の紐をかけ直し、レイは木々が鬱蒼と茂る黒の森の深部を見上げた。

普段なら決して足を踏み入れない危険な領域だ。

しかし今日は、街の薬草屋から「高く買い取る」と約束された希少な月光草を探すため、夢中で奥へと進んでしまっていた。

レイはどこにでもいる、二十二歳のしがない青年だった。

パツとしない茶髪に、取り柄のない茶色の瞳。

魔術の才能など微塵もなく、街の片隅で薬草を摘んでは日銭を稼ぐ平民に過ぎない。

自分のような存在が、この森の危険な魔獣に出会えばひとたまりもないことくらい分かっていた。

足元には湿った黒土が広がり、頭上を覆う分厚い樹冠が太陽の光をほとんど遮っているため、昼間であっても薄暗い。

（早く摘んで、すぐ引き返そう……こんな薄気味悪い場所、長居したくない）

そう思い直した、その時だった。

——ゴォン……ッ！

大気を物理的に震わせるような、不気味で重厚な振動が響き渡る。

足の裏から直接脳髄まで揺さぶられるような衝撃に、レイはその場にへたり込みそうになった。

バサバサと頭上の木々から一斉に鳥たちが飛び立ち、二度と戻らないかのように暗い空の彼方へ逃げていく。

それと同時に、森の空気が一瞬で氷点下まで下がったかのように冷え込み、肌を刺すような殺気を含んだ魔力が辺りを支配した。

「な、なに………いたい、何が起きてるの………？」

腰を抜かしそうになりながらも、レイは近くの苔むした巨木の影に慌てて身を隠した。

息を潜め、震える両手で口元を覆いながら、恐る恐る視線を向けた先——木々が吹き飛んで

小さく開けた広場に、その『異変』は存在していた。

「あ……がつ……、く……ッ……!!」

荒い息遣いとともに、一人の男が膝をついている。

その姿を目にした瞬間、レイは恐怖も忘れて息をのんだ。

周囲の暗闇の中で、その男だけが異質なほどの存在感を放っていたのだ。

（な……なんて、綺麗な人……）

平民のレイには一生縁がないような、あまりにも圧倒的な美貌。

透き通るような金髪は薄暗い森の中でも木漏れ日を反射しているかのように神秘的な光を放ち、まるでガラス細工のように精緻で、彫刻のように整った顔立ちをしている。

身に纏っている衣類も、王都の最高級貴族すら容易には仕立てられないような、星屑を織り込んだような上質な魔導シルクだ。

しかし、その美しい男の全身からは、見る者の正気を奪うような紫黒色の不吉な魔力が、バ

チバチと不気味な音を立てて激しく噴き出していた。

（これは……古代魔導の暴走……っ！？　噂に聞いたことがある、最悪の魔力災害だ……！）

その男の体内では、純魔力が極限まで結晶化し、神経を内側から焼き切る「呪詛核」が、ついに限界を迎えていた。

王国最強と謳われる筆頭魔導士であっても、この暴走がピークに達すれば、周囲一帯を巻き込んで自壊して消滅する。

「はあっ、はあっ……クソッ、こんな……場所で……暴走が……抑えきれない……ッ」

男——アルヴィスが、自身の胸の辺りを強く掻きむしる。

上質な魔導服が引き裂かれ、鍛え上げられた白い皮膚に鋭い爪が食い込む。

朱い血が滲むのも構わず、あまりの苦悶に全身を激しく痙攣させ、泥の中に身をよじらせていた。

普段は冷徹な知性を湛えているはずの銀色の瞳は、いまや焦燥と狂気で濁り、全身の血流が沸騰しているかのように肌が痛々しく真っ赤に火照っている。

（このままでは、内側から完全に焼き尽くされて消滅してしまう……！ あんなに綺麗な人が、あんな苦しみ方をしてる……どうしよう、僕に何かできることなんて……）

レイの胸の奥底で、かつて祖母から聞いた古いおとぎ話のような「古い血統の記憶」が、微かに、しかし鮮明に蘇った。

レイの家系は、はるか昔に姿を消した古代の特殊な血統——荒れ狂う魔力を自然と中和する「聖血の末裔」の、遠く落ちぶれた末路だ。

本人にその自覚や魔導の才能は微塵もなかったが、その肉体を流れる血液、そして皮膚の接触には、暴走した魔力を鎮める驚異的な「魔力安定化の酵素」が隠されていた。

「あ、あのっ……！ 大丈夫ですか……っ！？」

理性が警告を発するよりも早く、レイの足が勝手に動いていた。

目の前で人が苦しんでいるのを、見捨てることなどできなかったのだ。

「——来るな！」

男が、狂気に満ちた銀の瞳で怒鳴り声を上げる。

その声圧だけで一步たじろいだが、恐怖に震えながらも足を踏み出し、アルヴィスへと近づいてしまった。

……それが、平穏だったレイの人生の歯車を狂わせる、決定的な間違いだった。

レイの指先が、男の震える肩に触れた、まさにその瞬間。

バチィッ……！！！！

「あ……っ！？」

空気が鋭く裂けるような音とともに、レイの指先が触れた途端、男の全身を包み込んでいた禍々しい紫黒色の魔力が、嘘のようにシュウシュウと音を立てて霧散するように消え失せたのだ。

レイの指先から伝わった「魔力安定化の酵素」が、暴走する呪詛核の表面を瞬時に中和し、急速な鎮静化をもたらしたのだ。

驚愕に目を見開くアルヴィスの冷たい銀の瞳が、驚きと混乱に揺らぐ。

レイはそんなアルヴィスの異様な気迫に気圧されながらも、心配そうにその腕を支えようとそっと体を寄せた。

「あ、あの、立てますか……？　ひどい怪我……ううん、すごい熱です……」

「君は……いったい、何者だ……？」

かすれた声でアルヴィスがつぶやく。

しかし、アルヴィス自身が誰よりも分かっていた。

——これは、ほんの一次的な表面の鎮静に過ぎないことを。

体内で根深く巣食う「呪詛核」の根源を抑え込み、命の崩壊を防ぐためには、このような浅い接触では足りない。

より濃厚な肉体の結合と、体液の交換による根本的な魔力リセットが必要不可欠だったのだ。

一瞬の静寂の後、アルヴィスの銀の瞳から、理性のかけらが完全に消え去った。

代わりに蘇ったのは、極限まで飢え渴いた獣のような、狂おしいまでの独占欲と飢餓感だった。

呪詛核の暴走で焼き尽くされかけていた理性が、レイから流れ込んだ酵素によって「生存本能」へと直結する。

「絶対に逃がさない……君が必要だ、私には君が……ッ！」

「うっ……!?!」

ドサリ、と重い音を立てて地面に倒れ込む。

アルヴィスより小柄なレイは、鍛え上げられた長身の男に圧倒されるがまま、柔らかい草むらに仰向けに押し倒されていた。

見上げる視線の先には、先ほどまでの気高い気品が嘘のように消え失せ、野生の獣のように美しい顔を歪めたアルヴィスが覆いかぶさっている。

「あ、あのっ……! 暴走は止まったでしょう? だから、もう離して……っ、んむっ!?!」

拒絶の言葉は、突然降ってきた影によって完全に塞がれた。

強烈な口づけ。それは優しさのかけらもない、文字通り生きるための略奪だった。

アルヴィスの熱く湿った大きな舌が、レイの閉ざされた歯列をこじ開け、強引に口内へと侵入してくる。

「んぐうううっ!? むぐ……んっ、んあ……っ!!」

（えっ、うそ、嘘でしょ……!? キスなんて、こんなの……っ、初めてなのに……っ!）

頭が真っ白になり、レイの細い体がビクンと大きく跳ねる。

アルヴィスの口内は、先ほどの凍てつくような冷たさが嘘のように、高熱を帯びた炉のように熱かった。

絡み合う舌を通じて、レイの唾液が貪欲に吸い上げられ、代わりにアルヴィスの濃密な魔力がレイの喉の奥へと流れ込んでくる。

唾液を直接交わすことで、中和酵素が爆発的に活性化し、アルヴィスの全身の魔導回路へと駆け巡っていく。

それはアルヴィスの体を深いレベルで調律し、命を繋ぎ止めるための儀式に他ならなかった。

「んふうッ……れ、ろ……っ、ちゅ、ちゅば……っ、ああ……」

吸い上げられる。

レイの唾液が、舌の粘膜が、王国最強の魔導士によって食欲に、まるで砂漠の水のように貪り尽くされていく。

アルヴィスは狂ったようにレイの口内を味わいながら、喉の奥から獣のような荒い吐息を漏らし続けた。

「はあ……ッ、あむっ、ちゅ……っ！ うまい……なんだこれは……！ 君の体液が、私の呪いを溶かしていく……私の細胞が、君を求めて歓声を上げているぞ……っ！」

（いやだ、こんなキス……脳がとろとろになって、考えがまとまらない……っ、助けて、誰か……っ！）

口腔を過剰に蹂躪され、逃げ場を奪われたレイの口から溢れ出た唾液が、顎を伝って無防備な首筋へとダラダラと垂れていく。

アルヴィスの舌がねつとりと絡みつくたびに、レイ自身の体の中に、今まで経験したこともないような、底知れぬ『熱』が下腹部の奥底から湧き上がってきた。

「ふ……あむっ、ちゅぷ……んっ。おいしい……もっただ……もっど私に注ぎ込め、君のすべてを私に超越しなさい……ッ！」

（お腹の奥が、熱い……この人の熱に触れていると、頭がおかしくなりそう……。僕の体の中が、この人の熱で満たされていく……っ）

口腔を執拗に犯され続け、思考の輪郭が曖昧になっていく。

酸素を求めて小さく口を開くたびに、アルヴィスの熱い吐息が直接流れ込み、レイの理性を内側から溶かしていくようだった。

服の裾を荒々しく捲り上げられ、ひんやりとした森の夜気に晒された無防備な胸元へ、アルヴィスの大きく熱い手が容赦なく滑り込む。

「あっ……！　だ、め……そこっ、触らな……っ、ああんっ……♡」

服の上からではなく、直接、滑らかで冷たい指先が敏感な皮膚を這い回る。

衣服の擦れに慣れていない柔らかな乳頭を、アルヴィスの指先が意図的に抓り上げ、コリコ

リと意地悪く転がした瞬間、レイの口から艶めかしい悲鳴が飛び出した。

「はあっ……はあ……っ、嫌だ、やめてと言いながら、こんなに突起を硬くさせて……。君の体は、口とは裏腹に実に素直だな。私を求めて震えている」

「ち、ちがっ……。♡ あっ、あんっ♡♡ こんな……っ、へ、ん、です……っ！ からだ、勝手に……っ、うそ、はなして、くだっ……。ああ……んっ、ああっ……。♡♡」

「離す？ 私が言いなりになると思うか？ 君は私の命綱だ……。いや、この世界で私を救える唯一の『解毒剤』だ。手放せるわけがないだろう……。ッ！」

ビリッ……！！

「ひゃああああっ！？ うそ、服が……。っ！」

容赦のない力で、レイの身につけていた安物のズボンと下着がまとめて一気に引き裂かれた。無防備な下半身が冷ややかな森の夜気に晒され、恥ずかしいほど剥き出しになる。

他人に触れられたことのないレイの秘所は、極度の恐怖と、未知の快楽への戸惑いで、キュッと小さく収縮していた。

「……美しい。見ろ、こんなに震えて……私を誘っているのか、それとも怯えているのか。どちらにせよ、私の目には最高のエサにしか映らない」

「ち、ちがうっ……♡ 僕は、おとこで、ただの薬草摘みで……っ、こんな、へん、なことされる、いわれは……っ、ああんっ……♡♡」

アルヴィスの長くて美しい指先が、拒絶するレイの秘所へと容赦なく這い寄った。

魔導士特有の熱い魔力を帯びた指先が、ヒクヒクと痙攣するように開閉する無防備な粘膜を、ねっとり撫で回す。

「ひあっ！？♡ あっ……いつ……♡♡ なにか、へんなの、はいつてくるうっ……！ いやだ、さわらないで……っ、ああ……んっ♡♡」

「ふ……やはりそうだ。君の体は、私の魔力を吸い上げるたびにこうして甘く熱を帯びる。拒絶すればするほど、君の奥から甘い蜜が溢れ出てくるぞ……ほら、もうこんなに濡れてきた」

指先で塗られたのは、アルヴィスの口から吐き出された粘性の高い唾液と、レイ自身の穴から漏れ出した熱い蜜だった。

男の体なのに、こんなところが勝手に濡れていくはずがない——そんな理性の訴えすら、脳髓を焼き尽くすような熱と快楽にかき消されていく。

クチュ、と淫らな水音が響き渡り、一本の太い指が容赦なく未開発の穴へと侵入してくる。

「んああああっ……！♡♡ やだ、なにか入ってきちゃっ……♡♡ 裂けちゃう♡♡ 壊れちゃうよお……っ！♡♡」

「力を抜け……。大丈夫だ、君の体液が私を癒やすように、私の魔力が君の体を私のものへと作り変えていく筈だ……っ！」

指が二本、三本と容赦なく増やされ、経験のない狭い内壁を強引に押し広げていく。

アルヴィスは内側のひだを指先でじつくりとなぞり、レイの『最奥の性感帯』を正確に、執拗に押し潰した。

「ひぐああッ……！？♡♡ はっ……アアアッ……っ♡♡ あたまが♡♡ 白く……っ！」

稲妻に打たれたような強烈な快感が、レイの脳天を突き抜けた。

恐怖が無理やり快楽へと塗り替えられていく感覚に、レイは涙を滲ませる。

「あ、あ、ああああッ……！♡♡ そこっ、そこ駄目えええっ……！♡♡ おかしい、へんになる、頭がとろけちゃうっ……！♡♡」

「ここか？ ここが好きなんだな？ 可愛い声を上げて……もっと鳴いてみる……ッ！」

激しい水音を立てて、指が最奥の性感帯を容赦なく連打する。

あまりの快楽の過剰摂取に、レイの目はうっすらと涙で潤み、秘所からは透明な愛液がぽたぽたとめどなく溢れ出ていた。

「もう限界のようだな……。だが、指だけで満足させてやるつもりはない。私のすべてを君に注ぎ込まなければ、この呪詛核の暴走は完全には収まらないのだから」

「え……？ いやだっ……いや……それ、入るわけない……っ、大きすぎるっ……！」

アルヴィスが自身の衣類を乱暴に押し開くと、そこから現れたのは、凶悪なまでに太く血管が浮き出た硬い肉棒だった。

「お願い……そんなの入ったら、壊れちゃうっ……！ 無理、絶対に無理ですっ……ひいつ、

やだあ……！」

「死なせはしない……私と一つになって、君のすべてを私にくれ……ッ！」